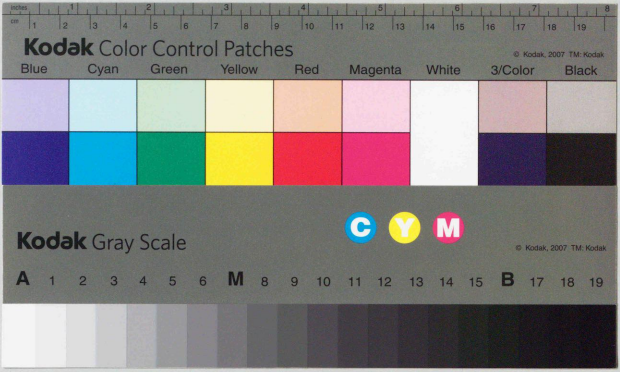

inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
C
Y
M
Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

I.45
ヨ
2-4

也有翁の著述のうち駿
つくぬとおもひしるに行かるゝ
紀錦繡のかゞやける衣ぐのうつを
りぬいでやさかりにまに花し朝服
より菖蒲山服の光の末までさか
姫爛のいろ深くなりてらさるの
ひやうしをまぢ考淡偉ぬ

WL45
3
2-4

昭 45.7.30
155225

ことをやりて老の涙をそそぎしを
そでにはよきすぼりきぬのすぐれて
たうとくこころぶとかたるあわれ
六位をなしし夫をたてまつりるを
十位きるを孫謙譲をもくむふ
めぶをぐすのをのみめるあれし
みるぎの市のみみちぐすりをと

うまし　おのふみを　はぶやゐる
安積ぬしの草筍のうこるかく
むれしまいでゐるを神わかくびと
ゐりけるべて修るをめる衣をも
けしつとぐかるみりるわのれく
が墨つく屋くもわぼんぎれとみる
くいのこころるまに此をぞてを

かいはの波も忘るるなり老のゆく末
ゆく月にあひがたきこそ世なれ

六樹園主人

字彙記拾遺上

海亭記

もゝなりし年よりこゝ六の名ある年一門生徒の勧を通して千秋のお入あり。たゞ系のもりふ久花ようて雨を散し
彩霞まとりて伴小鶴あり酒とくのて愛さよ人姐
寝て生てくたり朝あのこゝろハ不の他珍まゝ似て陰村よき
自中ゆゝへ一ゝてやゝとなき蘭の聚徒の輝もこゝよう
八月校も紫りもこゝしのつれるゝ花れの里の杜風も侯の
名ゝ世小天ゝるゝ幸ゝやゝ侯ゝんもゝゝ塾田深峯
峙ゝこゝしたゝるけゝるゝゝき神のめゝこゝけゝゝて
布外の佳観ゝあゝ人世ゝ ありゝれゝゝ温陇若ゝ支ゝ八爰
ゝ天花の業ゝゝゝてゝこゝ作ゝゝ業の一字の例ゝゝぬゝゝと

[illegible]

白鶴きて彩りそふ広の宿

浜庶硯記 [illegible]氏之霊

連俳の祖八幡宮に奉し小篠の剣とかいくれを[illegible]
輝折の[illegible]のもとの似くとかたれ中に[illegible]
あるこの浜庶とよくとしは面の際に[illegible]の[illegible]
[illegible]若木の俳あり[illegible]浦に
平家の陣とかくもの小の巻とかいに文八[illegible]氏の
のこころしに[illegible]の[illegible]の武[illegible]
[illegible]とまして[illegible]十帖も巻[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

鶴歳

巻と百行のかくことをきくとれいの五[illegible]の巻[illegible]
いとて[illegible]

居さ泊しその三ッ四ッつれたるハ清少納言にもあはれかられたるを
ましハ暁の諺にも父母にねよ有夜あるさに起されて我よ啼
夷とやらの楓橋の夜泊に唐人の寝覚をもおどろかしぬれバ
むかしハ今ほどに代たるこそ方る風雅の様におもひて鳥
鳥なき里の蝙蝠もむかしハきら田畑をもかりて麦くらひとめ
大根をつき曾哲が隠居のみしかも栗栖師の秘蔵の
柑子もなをいたうつまわしかし嫌ふに古きなきをまくりの
鳥相応に安き宿見えて名を付て小鳥ありなおおくも目白
三匹のあともおかしさの上はり不幸ねともかくもひろき
されをされハたひ巳と傾て粉の真似とか僭上とや語る
と鳥の無理をたし又鳥麦鳥風の様かりなる食もおれ
身をも羨の君なる段越して今はくいへる点めしたしよ

おもしろくあんかうりすのくちるる鳥りすれしのちの
浮名もきえて長く鳥大明神のめくみうけしもあへしけれハ
鳴子の枝もみすさす業山も寺と代々の世をおくりて
人の為よなそるへし身のたのみに住しへし

送疫氣神表 手附東武

今年伏の初春よりこなたよりて老ときにきえきたて
疫氣におやされて清浄のらなまなを無にいい穢濁のうしろ
つきて陰陽の味をといさらて何の花にもとめらるるせき
に若しぬ上ハ玉なれのひまかの茶葉のかりかのかうれむ
下ハあやしの賤がらへまてもかしらんとこうなきといひもなし
芝居へ大そうして出程ての増幕いくらつましりかの上色也

客なくて夜は宵のり鮑くらふよしなし葛西の風物も下冷
にやる人なけれハ隅田川の波も白髪にこそ見れ　て水涸笋の
細えてと流す行衛の汁椀も長髪に悉麻の姿を失ひ半杯か
在羽の弱りしられたり醫者賣薬の門の旅ひてきの精
の匕先も平氣散にやとしひまなく行ハ附子となるに似たれ
さして手柄の療治なきわくはなし薬代もよほし噫ば秋ハ
夕あれハうつろ災たて下して吏民まくらもしそとけのふそ就くハ
天神地祇なし照の眸をめぐらして噴氣の配術を迷はるのはあ
へ送るのへさしハ巨ふも幣帛のむつしきにハしら守し
笹の葉にそて切らる大般とわらして及を守なくちらると合せ
ならへしと丹淑と捨て苦まる傚悉をされさきなハしめん

菊合賦　興成因集

花あるしの榮化らよすゝるすハ論まてもあるましやさしく似ら
桜さくらのされなくて何なるらん咲ハ吉野の雲となり
紅葉ハ玉川の露をわすれふあらハ二月の紅ともなり
あらハ八橋の杜若とふらいて詩客の車も停むへし昔
よりの神もあはれなれ浅深淡淡の色ハはしめて花彩ハ百
枝の新奇を嘆て乗ることに自ならしくいはし園にまこと名
と咲ゆいもいし陶氏の菊に名立るハ只有のまゝのかたちあるに
よきまゝであるしのためにもふへくしわか守春の雨に獣
と入ても栽らは橐駝のまんとてさし杖のもとに常をと西
て洞いさ作園の心ならやま次いもくつけききち大根なと
味をもしらんあれハましてや月の花とさされていふてう

[illegible]

雪見賦

月美人なてなきと雪人ひさるとト戸今ねねはなか
らはきらハ為婦春人爰ハ接きこころ見ハ[illegible]

[illegible]

白くさふしふくおかへし吟じてもりし伊勢の家食座とう
いへるに住る女のなりこの客の羽織も返して露のあし
たに立つらして初雪やらうかくろうのきしろらはすさ
びしとも思ひ出侍ら今ここらはもさる情ある女こそはね
につらしくそとあれりしきに滞りて出て立別れぬいうへあ
なりん名もよく寸法てハと宮いつかもそう酒へらくまんと
いふに秦皇の雨なしすも宮に立すしたる座の名もとどめし
ひとは門にて妹の歯でくさて

面白れなの跳ありや小挑灯

旅論

俳諧しくハ芝菊軽の情をもうして旅情をしらぬ人ハ風雅

もしらずかしやかくゆきかずハ旅ごころせよといふ風雅に統本よ
との今言まで覚え侍ら識よたに月雪しらあるさま
まで有ぬへし又旅とハ楽きたれハ花ちりしハさ々あ十六の
春よりん始て伊勢に詣てしよりる六日ゆえの旅りを今年
も此風雅もろて出しけ今のみちハ年々するまた寸是より
十とせの今まで又た宮詣のみ仕来してはよ旅ら
事ぬ無ける小川風定にあるなく之の形を唱れハ六月の東中
も宮くらん程ると古人ハこ之けりくや妙ゐと吟れハも境の是
それは境と思へえ形ゐやもるて此や後のひくの秋小舟しやもしるき
有難みの此拾小册ぬ義の名をまあるまをきりすたくあゆしの
篠といふものよりとて蔭垣の南らけ又ハ井戸屋敷の端はさし
至るとこそられけるを

南蛮のめてたきことは八月十五夜の二つ月
きらびやかなる雲のうへ
とりとり様々の十二つをとりあつめ八月朔日の門を取くれわ
たる日の長さをいとゝ
のおもひをなすそよかるのはてはなし
めるさま茶屋の婦こ泊の下女まで
初穂の米のこと
稼ぎ家こ千里と腐るけ
もつてゆきハくわれ米もき物ハ
まつ浜江周の続きせるまゝ
より桑の芝を掛垂て
そハつきあへ

[illegible]
茶後にしらし若葉の
類も時に細くそ
てゝ泊を行
つまゝ
[illegible]
模けんまろ
釘まあけ
長ふあ
かまして
き長八七
ぬへ

に横雲ハたゝられし国ハ猶さめかねて遊ふの並松うききはず
いかんかれの橋よりまはるく矢隅の家は物楽なるしわくて
茶の匂ひのうハしき八浦山しくへりまちるに休みるへし安倍川
の渋ハ山吹の面影ありて信るう岩淵の小豆粥ハ中の咲菜
なすきに似かうていしもくつけ之大松漬ハ滄化芽としてすへて大磯
の定なるへし茶屋の内にて車の数をわうなめ酒の盃ハ茶碗に姪
並てはのけるさ並ハいふさかしきでもち丸に視指であてらるハ
ともにぬうらぬ老覚へうかりの女の上を本乃守り流よつくしね
由池赤坂ハけてうし名うて吉田浜松ハ比味ましてあらくし
足袋異紙の商ひハ沢のお紋くまうへし赤坂垂紺おくれハ
の風ましかうん片輪車の染入をいりましゐるちすいふて旅泉の
情を慰さむ便とハおすれかりの姿もおふさいりうかくもあに雑の

菊しにんとつけらみ茶に情をくらふなしさけうる浅しもよおかせ
入しありなん五十三次ハけうに旅は旅に桂うき事ハあらうと思ふト
本促の宿りしかふせくて行水の湯ハ濁りてと守片破れの生き家と
そうれハ古来火の灰阪よましまちで哈へそもおわえ寺さて下
妓座ハ彼れしなうて赤子せうりて菱も蕎寺のひの土臼のうさハおき
まかそ頃の女夫いさらいと些敷をもとく引立ならしおくらい形よあき
ならまと足つかれてく揮うくぬ男よからうれし床かりるうまきられ
ハ我鞍に縁の骨をいてむしうき目つき目利風雅の旅すしても京よ
つき寺をふに沿なるへしあるいハ宗の宗合に興をうしなかいてる空
の宿ハ視を消して夜の夕ハ枕に此しく月の曉いろいもねふれし
我らくさらて旅情の附合に及ハ附眼とふさきて夜よ来往
されて尚のしらわ紙お量のまあかたへハ今世の軍者と思ふ

へつらはず軍はせれども引佐生の帰りてへと数やるは
あつまれ軍せ之家之人びとおもとめとも人をこそ用ひ時く
州千里の旅寄とこそへ山二度もれ出て来と書つけぬ
以来いろ〳〵旅とて東国き隈へ〳〵こと海山をとえ
し蓋風雅の居なり和歌と真ろの涙をなん人へしらせん
とそ

馬こそ痛しとあるつゝ
月にうつりやしとなれを合
家紋の夜ふるあ少ら様
お女のはまぶのうらうる

貴小女縛

帰三徒のたわるやと家を立て親子たちと父母あり一方
拝へ分り嫁して夫後ふ中の時まり名は之妻ておは徒ちとき
あをりて八人あの三拝小婦して有る一鼎の嘶し三の拝へてこそ
かさ方なる地氏の家を張と持ものの宇るの月まの時まれとれ
して人なり雖く求て拝ぶきれ三ちとやあやて十二の拝ありて
ゆ人黒天のつらめおの小姫坊小まなり来の筆と於へ
宮地氏に傍られ家なれ分り

孔七何ぞ人のうの 小 江

（時代とるの後作）

鉏花せ蔵

天数国の上戸の家陽天なんて悔しとき色で戦ふ行て世て
ありきなるとるふ上とるるあ千し忘るるし涙市上せるる

きて枝をうちひのへにへて五せんねりひすりハさを
愚ゑ隠らひしれハ銀ゑ赤鳥鑑ゑかゝるゑすきゝハへ
ん枝せこに古き淵あり久しく久三うまも枝ゝれて今八ゑ西東
華も流ひきゑの家なちを丸上て閑居のたをなる故淵上示之云
紫貴ゑをのちをうへして　しもゑ茶の根八断つめ
今ゝちをゝ　花ゑ稀ゑ　いゑゑたのゝゝひとゝれ

枚み銘或人枚みを求の賜ゑ為すきゝて

爰ゑゑ早瓶ゑ多ゑ枚みありて用ひきれハ亂ゑ移して味噌桶
のたをうゝ用いうゝて虎の巻ありゑ虎のゝゝうりん
ゆすきゝと作ゑ米し用一幸とゑ仏ゑへゝゝ仏世のゝ
へゝて枚みを紀ゝをゝふなりゝ

千年亭記　為下陸氏し需

毒ゝ名ゝゝ千年をゝてすゝ毒きゝふゝ年八古人
のゝりゝゝをゝて毒ゝ今更ゝゝきも毒八華ゝゝう
ゆき姿ハ目ゝゝあゝゝかんゝて蕉門の風雅ゝゝゝ自八
世式の空心ゝゝへゝてゝゝゝのゝゝゝんとゝゝ
天易八ゝゝゝのゝゝゝ才流ゝゝゝのゝゝゝ八毒ゝ
東波も七貴ゝゝゝゝ拙ゝゝふゝ一銀翁の伝途ゝ
ゝきて陸奥の毒ゝゝゝゝゝ狭ゝゝ日の間を作ゝ阿ゝ毒ゝ五
明の舟停ゝ海の蜃ゝの海年ゝゝゝ八ゝ月ゝ行馬の旅ゝ
水戦ゝ姥の秋の老ゝゝゝわゝて能ゝ浪ゝ毒の姥ゝゝ
ゝ年の名のゝゝゝゝ年八ゝゝゝ代ゝの作のゝゝゝ
名ゝ功ゝゝゝ山枝ゝゝのゝゝて年ゝゝ月ゝ陸ゝゝゝ此

亭の踊風ハやと春もすへく恋よとうしき冬もあらへなれ作家ハ
たゞ許らの花らと作て前のはかりをそ向へなれはなそれすゝ
多くそそらぬ

野遊集序　並川合氏需

仁者の山をし遊ハ知者の水をも亭とそすて今常此花を
此をいふ哥ハむかしへ出る武蔵野の路なれハなれしそも歌よむ人
のいふハ花を後の花なとく思ぬたとへハ法もありぬへし　あなし
よのいつも白らん八目まきそうしき方のいうハあるへきそうをしれ
の俳諧ハいつ同じ此の花あらしきりとも帰りそめて古
き揚ハ古き作りしてもはや時よ新しきおもよ字を出りめくらし
ま武蔵野の世をつきしみきその家あるへし

探旅流行序　並西田氏需

灞橋よ驢を挙て陽関の曲を訊ハ橋よ鞭をひきてうく衣の袖
よそし同じ旅の哀を住みかくしたれハみね田のたゞるをとゝけ寸
是ハやましうんにゆへられてもけなきつさハいひかしをかしくも
多からへしかうしら箱川をこの枝よりあらそ世年あるか
如をも旅まてさりしより世をも風を楽ふ人多く八枝笠の姿
情をしいはいりまとに牛に汗まへしそれか中ても此一推の珠
に縦横自在をえてわかハ陸路の舟よせ常を訊し志浪の嶽
よ意味をしたふ小谷の住の作をとへハおおおもくよき男あさくり
て昔らかよ竹杖も作しつへく今座の語よ客をとれハ笑上手
の女ありて酒おひよ家鞍の疲れをもをるたのしさらなししさりへ

[illegible]

贈五條房西賛

小紅殿の教川八絶碧流の曲瑞りて四人感を起す白髪もう
矣見えた蘆和泉の家もたとへ人を煙を使ず楽のあるくあるさう
或[illegible]
[illegible]

五條坊主胸で眼鏡を拭ひる[illegible]

[illegible]ある人の[illegible]

蛙歌

蛙[illegible]の浦のみるめのもかりぬ古今の序
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

美人記

[illegible]

[illegible]

さ門人三千の徒すんて是を催化せられしと推恭らしこのい
西よひられて風体の定ハさらるへし晋其角ハ作よひられてと枝
も葉よらくかて八雲子ら敬きし白雲も本のことくとゝすかれ
てとけらさきなそしなるへし強てそのかさけりを求めく
今も小者見よ大ぬ体の大根細
うくもふへるやうすあまさの詞をとらしても峰ハ風流をさ
流は乙や汗六らるのし西くいふま
その甲て草ぬらひくの大根引
惟然坊うすかゆハいらふ
大根引ちらしもゐてし哉みすそ
ちら川ら夕のふる果ハいらふ
継母やしなら大腹へゝる大根引

はましの風格ハゆるすきるねきしふ我をたもえて山風ふ偏
のこらをはさせししもしに去てゝ分いさやしゝせしらめ
に世上にゆりかくされ移てお麻らへまと例のわらをよりきす
きらり謝や五十年の変化とみしもそて粟瞬のゆる
向もてそありける

悼又玄舎文

無常の風のゆくる手をめまんとぬ秋そしも侍さらそらは水室
月の十八日よ便の人よゝくそ過し比より疼のおもやすくくら
うもの作れを久しくおもなかい作しもいふらしや妙ゆかんときと
えしふ字の終に例のこほやすうそをもこえわくたり比思さ
のおつや わらん本を秋本の秋すららわそ咲ならもおれハ是折て

使せんとさしもいそぐぬれるも白文の白と書し侍るをよく
見あしたの露と消へしとくいふは知ひらくへき世ハたゝ夢と
わかちらる夢もなけれハさなから吉田は帰らんといひくへし
子並の不しよつらせ二つらせて今ハ尾陳了蕉門の二老とたれかいへ
四方に馳るかりしか幸も古機も作三つはかりもたゝきや
吟もいまた杖にもかけす机に眼落も息かたれくり未遠く
たのもしく人々の心の翅もいなる嘆すらんと家してそもやい
しられぬ知流にてふさすくらの袖いかしもの庭のなくもとま
札かむかしよ手紙てあすの古日とそといへる

昔ハまさ人となりさぬ夏の草

贈巴水詩

廿五年の勤労めてたく功なりて今や再日腓腸かおき
まかしひえしてとつかしの世常にといとなむしかる身をおいて
はしめてその心あらさるかなし巴水かとしく終をよくす
るハ世に多からす

夢や落とりて竹に鶯しらん

其別墅記

あしたに剣を佩て営中にひさと屈しゆふへは
つかさのきし夢ハなくかしわく理屈の無の戸をのかれ
ては閑居に亭をあふるのあるし八茶をこのめと素人
ならぬ利休か寺はちもかさきれ次下戸なれとも洒
とよし手すさひかし洞明か風流をまてふさてこそなさも

御門のその五殊のゆうなるべきやみやの山の
あなたこそ家もうれたくいかにかはものすごく侍る
なるをハけも変へきの雪の消て夏腐黄ばみ寺つきの
夕ハ頃をも俤ノ弄とたくけ面梅のあるもとの市の中
にありて市ノ車馬の喧をきゆ聞へ仏もおもはもや
き〳〵温泉巷を麦切ノ自宅をそしり庭ハ僅の名花なり
北と二畝の宅をひろ〳〵八千町の四つ〳〵軒ノ内つきと四之
美ハ嶽の月をくゆ歩の鶏吹を本花ハ早出四〳〵花ハ
巷のうひてうひて車亂ノ夜分ようれ〳〵すまして
編袋の雪もとりけハ厂ノ内世帯てひとり指ハ
ノ人のなるとを寝ぬのハ師ノ人とし書信居な
ると冬ハこと仏ノ山〳〵のちと刻漢ノ作へもたい

す佐師ノ人のもとの水神もけ〳〵寺火焼ノ自ノ人のおもの後
し青王維ノ輞川の別墅ノ之の和すきハ仏ノ吃長
月ノ人のもの〳〵今き旧友ノ人のもの炎ノ拓れて雨の祭
春ノ人のもの〳〵祈ノ十五夜の月いとく時たるまい奥ハ
志ノ人のもの〳〵きき事なる紫杉ノ閉て編袋のなかに
そのら拓ノ岸ノ人のもの此を池ノ人のもの水ノ英逢のなる
絆ノ人のもの書を忘れてノ人のもけいとき雪ノ人のもの書ノ人のもの
う〳〵ノ人のもの紙ノ人のもの人のもの人のもの

又ノ人のもの柴ノ人のもの後の拓ノ人のもの　如

吾樂菴記　五葉雨窓

獨樂園のぬしいろ〳〵其記ハ書と人なも樂とのもの吾ハ為

のあるしハ家にも花を求ても楽をうる寸家にもたくし
天にゆたかなる世よたのしミのかのはましハなしら樂を求て樂く
するものハ哀情にふれ為に先だつ川までに秋風のふきしわ
いとひぬいて今年ハ強く月くまなく候せハ亜山の雲ものミ立さと
きて夕の無吟説ことおやましきは彼の日ハ風あるにかへせんとさと
くもれらぬ山おろし吹て賞心癈すへしら安し況媚
樂舞遊のたのしミよねかるまして世務仕官の上ハおいてをや
芦分舟のさくらくらて難波よ昔のこれにかなしさるハなの
しミを求てくらしぬを求ひといふへしされハこの境にあって
世よ平生のたのしミをしらぬ人ハ夕に友のしミて須よなの
ま分よく命をたもつ人ハ何れのたのしまれんかし此樂に足し
うる寸ハ様よ音樂庵のあるじなるへし

月花の當や心の露乃数

桃花石記

一日本全きる所の岩石日或人の家の數ある色美なる石の名も
きてある事久し或ハ人是を怪めともゑつる事面へとあらハ
てなきよいとやまうくねんしてやらねとそきるとに日吉友
良質なる者凍く定てあるし山に更粉とくくして婦仏せ
か是へと石工よんするよ教ゆ白此名を桃花石とよふむかし隈
の國の佐彩村勝原村よりいわしも性至て硬し此よ用ふるに宜
上とす故ら爪今其名も世にあり往て或事なし世よ称し
て人志しも最珠とすへしとをめしとりつゝいて是へと聞しめ
手水とも湯ある具とみせの為られ為る記を書し事とも

や白誰に既に定せりも外に何といひてか記と作らんにも
人よく信ぜよと未会にいふはやまず辛ねていひし三人
の信ありとして不言の行を始めを既して一人の信語て言
と疑をもつて一信發きあるとでも何を恐るを畏わりてあいひしや
残の信きえずしていつく二人は既に行へをふるふる者は
我一人なりと辛に三信の行をもにふかくいかりとそれ信の例
とおもへはいふも即いふたる時に家記を作しもといい
かも亦即記を作るといふものなりんとやもとを以ての名にと名
すみふ桃花もの也いもねて溪をなすはいふに似たりて石も文ある
つきたるなめし あるをもて笑て辛に是を記と須

定掛号序

大井氏尾光子は武門に生れても家の枝に帰らすさいしはいかい
に悩る所ありて病もに従ひてすかくては爲も成へし亡とて
つへき物にともかく茶師寺ゝをたのみて五斗の米の家を
たち三石の茶に茶を甘なひ常に蕉門の月花に指ふされしを
然谷に無常を観し桃口に忠も殿りわくに茶をもて寸
情衣にましき寸枝長羽織に大脇差地中の清水のむかしとのへ
せくんしらぬ人よこしうちのもとしはかなき事に好きなるひとさ
る事ありてつくりしのはかなしいふてし今のなつきとも然らしめ
中に茶をとし寸二須の田に呈もよくさす朝三暮四に濡りあ
まてりの賽にねつけるのなめし幸や不幸たりん不幸や幸なる
らい世に侍る人はいさゝかむし人の気きをとゝろへしいさゝ茶話の降
ちて号と定てしもにしるけれはませて自金斎と名つくもんの

あるあるすおきるとしてくみきうもあり

名聞說

まき木川の鮮はまたいのち居はまあんまとをむの川はもり
鯉の多くすしいはとしてきけ多はいの遊遊せ美の樂をく
当るはるへきしいるるすて為の武そうんし雑せ人はる
き知るいの当るこをもいかれるこしとはいの知るもは
るもるすしたはるんやもをて卒るを樂舎をも侵る

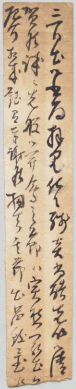
見えすくや貧のこころも水の月

夏白夢記　五山社氏く需

見て是をとゞしまする時も門の及ばるまをとゝるこえすせ

いるんする者人のたくはんまを居る変ひは其はは之の閑る脫
るをして土湖氏う餐を寄するる二町洋備竹係物のあるをいきて
賀庭ホはらいはるるをしるる業はもい廉長の未るるもるるを縁
ゆる方八求一しやはれはれはを多ら舎をしやき人をいはは其はに
さとる名ゆ一武しるを他をいを要る名もをはるをしいはむす
あるるをはをはをて俳もはをるれ名くれはなんををとか
ばきはなるもしはれをくろをのかをるをいしは人を水はは雅
の天眼通なるんやを陽も草をはるはの名をの花をはは
月をるるきるの要をるるしをを赤ゆを獄をもるをるる
文をるりをきんや駿二餘の春川流をて春ををけはるはんの
春を流ゆをるるくれて俳をはなをすはは一中をるを外流
を助をはをれはれはの是をはの武草を宜をむを安自の二をを春を

挟み込み



挟み込み	裏

一 ことわり也つゝをといふて白は袖の花となして深くそまゐるとなるに
他の筵つきに深くふかしと夜よる後の行きたりて果てのかたく成なし

宇都宮衣 拾遺 中
岐岨路紀行 延享二年
乙丑のとし
君に仕へまつりて卯月六日江戸を出て尾陽にのほる事
と志なく故国のなつかしきにこゝろまよふ人にしもかたしあへるよ

卯花の中よりしぬを途の杼

年くまかしこし武府の人にしはなしとはなしまゐる
もあつて道ふところひろく別かりしなり

麦の穂の聴もめでてこれらの帷

今年も暮るの山路をくるゝえその仕官の身のならはし
ころなすいする旅のいかめしくさかゆきつれたる老村童
に事聞すれしきもあいひかくさんハすけなきゃうみすれハ

拾遺 上 丸

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のめ[illegible]

[illegible]

[illegible]

十一日　やそしま　鐵もち　武蔵坊

和田峠と花とを決めいかれて行き嶺にて分すと
上の方ハ信濃の峯といへハ日本なかしかくてきて
されは風流きかんち　ゆそしまへ　ゆくとの多
く残て分ふくはに雲浮き中をとろかす歴尽てとろぬ
かとゝ

雲かゝて分ぬ　山　郭公

行尊僧正の花かゝりしこのゆ　谷の雲のそちら
きゝ花をてるかゝへも山里の貴ハちとゝ　ゝもとら
雲のうちの夏ハてやわん　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
つくるゝ　ゝ　ゝ

花山　ゝ　ゝ

十二日

あゝハ猫　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ちゝはハたゝて後ニ ちゝあらー

けものゝを人々ゝの里とふこと人の指さしとゝふ

又つゝわるゝ唐衣あさしゝ

なこりやあるまうゝの里

是ハりとゝの母松しあゝはゝのゝゝわゝれ雲もむ人

のまわひしてくはまるいはゝくゝくしこゝよあゝき

翁のゝ世俗ゝひつゝくて深ハ三段の里ゝゝ

野鹿 とゝる

十四日

大井ゝゝゝゝ

山中ゝゝゝゝ

あゝの岩ゝて初て竹の声を聞して安ゝゝといゝめしくて

竹のゝゝあゝて家ゝゝしゝゝ

十五日

出ゝゝゝゝ

あゝゝ日家ゝつき伝ゝけゝ白ゝ

熱海紀行

府民の氏母公ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ豆州のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今きもくやあれと折り枝のはえたるすし蕨

ときおりの湯やハくしに成やうのはまをくれハ日和と

六ゝしてゝ有なるゝ　ときあるもてく山水浦波ゝひき

ゐていてゝ　かきはしの世の中と浦りて　ていてゝ　ゝ

ゐき細り初をゝもあれなり五てゐの名のたつきと

するあきゝ　耳ゝれぬ奥の名もゝゝハひとゝはま

ちゝ　なるはゝ　ゝたのつゝ見ゝあゝてみなゝ

山田をつゝ　ゝたて荒廃小屋ゝ月夜ゝいきゝ　ゝつゝ　ゝろ

うゝ　衰ゝの庶のゝハゝまゝ　ゝ　ゝ　

[illegible]

平安朝の頃ふるき平安の人の[illegible]

[illegible]

[illegible]

日の出山などのやれ外蔵者あり該豆の国山脈とうそう
景色ふたつの内に富士八面と限りなき山の秋うつくしれて
宮しろき所長鄰尚綱とかいへる山の德元すべきなるべ
ほかの山のうきやうの富士はけうきき
北にはしらの清殿の后の跡のうつくしきもの
とうるうるいれの所うる柿ぬ紅葉の帝なの后しるるの
事ありてさきねる数の科とてうつ清されて怪失のふ后
ろ八幡いとんし紅葉ふ家しいしかも他名のうきを
いとして二の利ひ一たんいるおもしきてあり今しハ幡
と外ようつて宮を渡り跡り付を常と后のうやうを
座たきしいるあの宮の内の社の方へ段参さしいい
やれいうれをれはいいう侍ふの社のきらいたちはけの

天神

おとにやや物ものおもしとあの花
ふ鶴り婚
ほかう寝ふみ多き冬の日あり
大将ハ遠くうすかり
大一ほやや先日しうく遠　日　慌
とうふいとらいさき将の向ふくほでう仲の小将と
れいとふ又大将をとうあもほ人のつたもまり
かう
ありしやや先ほうよ殺ち後　ひとり
十月十三日の原をたいせのいて四藤人々せまの原ところ
ろ後食る三枚くりかいして半仕古神もは後す

[illegible]

[illegible]

[illegible]

武蔵野紀行

庚申のとし霜月のはじめ[illegible]江戸を立て信
州に出ぬ蕨よりたいのうねと十日あまり[illegible]
あやうしてあるとしは[illegible]
[illegible]
[illegible]

内洋草

うつの里より信濃の国へ三里三歩ばかりとかや巻き馬安
いとやすの山里も信濃へ一わたりせんとやの家す
まありけれ今はた老の物の月よりなくいさ聞て
眠られぬ夜のの里もなくてなるしられぬ秋いな
るとんときりの山里のくまなくいとりなく思ひて
のびとんと業月中の八日五三ヶ夜庵にあり月
ちなみすすきのそ屋のこゝ也活なるものゝ三
止まもやもせるこゝろいとまりなんとかの虎まち
てけれは伴へ信濃の国中長くるりよ千家いねつ
まりて物もなく伴へのへ新もたえすかし八家人
所作なんとかの名のまを七個にて新を惜るなやいと

ちらそしかりてきんし家文ちらまちんちらに光
もいきこそとてわまへ大多根と又なりに
如れと家ねもはま歩りて鶏の家戸ときこえ
なり

ねもいつる信ありとうなく里の月
うくいとそんなのはそかなくへなんし

片耳ようこんの町のもしの家
ゆへ人家とけんとは山のくまき月の光えは
いとあくしし山四川ちり川とるかしあれはし
川とはうちこもり

八月の川ちくきの信もなし
すきもあるつめこなるしあしこの声ま家へな

[illegible]しのをきて

こうしの人の跡あり[illegible]やかうるる[illegible]時雨

[illegible]く[illegible]月[illegible]めくきて[illegible]

[illegible]

[illegible]

いこう[illegible]

[illegible]生れ月八[illegible]人[illegible]

是よりの[illegible]

つ[illegible]

又[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

目の病も忘れ才知きたりの若人めいて石子一たの方に天狗岩
とゝへ出せるすゝ大きなる巖そたてる所一の山とゝたゝ
出るしるしなる怪しき岩化の図もとゝ[illegible]
遠びのあるもちたやもや天狗岩
次第も落きうく岩と峯本の怪しきもて七回けるの客の
てお見とゝまる所ら休らふとゝあふげめり　しき祥殿
らえたりて夫まて六十間半とて篤き汲あり社祢天
まいそてまも寄り是まて登しなもあるとゝなき
らたりへふとゝかりて変あつきて海る
仮やしめしたる神の
くあ所ゝるえあり当きくあ岩人ゝ
ゝとゝもめくき霊地なりしもあゝ日ゝ

ゝるおて世日まてゝしゝもかゝの半しもあまゝ
せこまるあつし
一日松流垂て桃諾才余毋小就して
ゝて後て若山日長きく　水を
いしゝ　なて西まゝゝ
あるゝ岩の名長谷川若山といゝ人ゝ
時猶すい醫師羽白ゝるもの紀年ゝて
ゝて年と草と業の名をゝし
とまてあゝふゝ人も桃諾を踏あり
試ゝ家に更鈎居ゝ一日ゝゝも松ふゝ
一夕で筆へのゝりゝいゝゝゝゝゝゝ
ゝゝかな家あり山も秋ゝゝ

ゐていとさるらし定山里とても思ひしり更函居はし
もいと牙城なるあるまじけのさまをすてゝつき
て閑居なりもいとほしきまろつひたるやうもいも
なくこゝにあり方もいと見安きあり
庭下苔はきよはきこゝにてもいとあり綱岡和尚庭隠し
てはいとあはれなるこゝろ侘のこゝろ久しくわるこゝろ
らしきかたちの陳述してこゝろ侘てゆゝしなる
家なり

深山客稀有孤猿豈謂高軒過遠村
煨半無牧寒渓力肯令主帯鎖空門

韵を賛て附す

満目溪泉又斷猿渾忘塵想宿山村

逢君猶憶重遊約嶺上雲多鎖一門

ある夕あるに酒すゝめしてこゝにいきのつきあるくもゝ
沐の杜若をつゝて水をもり手を洗してもちりもしに
若花のまをもとりたる花の形をまねびしの
八月九日こゝに咲さるかきりさ
はてくこゝろあるもりもし花
若きこゝろの歌のあるもりこゝろの埋忠多くこゝ
ゝ柿の木枝を送りたるをあやまりし血流れな
人くさるきてゐたりしかそ歌あり
こゝろてくまりけ枝向まうきを
いてきこゝ柿の尾この　由ユ
とゝふ例のとゝろこゝろ

あるー暑竹の一個とりいだして賛を求し唐ぶりの歌

ときさしたるなるかりくいなしに絶えつつ

不與梅柳交心似靨塵黒

露深夜雨餘何借二妃淚

と書てあり

雨ふりあてはをのまくに試みるもしに信ぶかなる

彩毫を振てより是ひとりかたりもてなきしと拓く

ゴ日をつゞ二度式家を拵るを日くてゝ又小生を

てなの山をく猪の戸ーきこゆるー花見酒多の

人の山をなる猪と猪の淵を求めしてふと伺

居なりあつしてそなりまるふ所をあつくなく

ろて姿ハ三ん寸

彩毫を振て猪きく山の夕ゝ

と書てあり

廿五日かゝりて雨降ぬふ唐渓ゑむして出り川をいまる

不ト思ひしも二里ばかり行ゝをそのかゝる例あるの

ひいれてこゝ毎ゝ夜行ぬ行ぬひくゝて彼いのまの

和つてゆくいくゝ日は段ゝやり下りてやゝ至ゝ着ぬ

彼の境ゝゝ少てきくゝてゝ有しも何ゝも寺のかゝびつゝ

ゝ有ゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]後学の文雅[illegible]貴[illegible]

[illegible]詩[illegible]作りてあらまほしき

張北山林遠府城相逢多日雅談清
秋深老樹流霜色友静流泉疑雨聲
驛馬徘徊都下信啼猿常動客中情
總看隣居商家在豈比塵闠利名

いくまもてもろのしるうれ多八
仁四まろきほそーらろ
あるりしあんすなるあるの情状ありし事
ゆえりて例の河海ふまてなきれぬ
陸ろろ象や山台の秋のくれ
あるーの水ろくいてくぬ

世日ろつまて内侍をもて入るあるーに仁賢下まそ
遣りんそともたいあ汗厩の中なりのくまて笠を
拾へ似げなきれるえ例のうとれて

老武者の秋となるねれさね盛ゥ
さいとう弁面まとてるーなる

いやあのこたひまいつきとろ筋ー芝をけるとた
けるの名をもいれーつれいなるろー孫とへー
まの遠ーりに宿れーいくとまの貴ろくるまた
めるまねれろんよ仕への途ものれれのつく名れが
つふの深くなりまてけやゆ中ゆ命つけきなつき
ろなりろんれ様ふまるいるへるて山れくろ山ゆま
[illegible]いいーろ家ゆまーれる家人のろやきまんに

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

安永二年巳九月　七十二翁犬也有

中つゝ衣　拾遺下

記余白俚言

相模の人のゝり梅雨時のあやしきめて問ふ侍りをの
わゝ俗語もサーまりてさねをよくいふものなれ
をこなすおれのゆゝよ引てゝ反古あり行ゝ〜へハ
岸盆わをびよ例の子供の踊ゝきゝの唱ふ俗なと
人まをこのゝ引てゝきゝるありされと又ゝるゆりあ
ゝわりて孝を出さをなりぬ只中て引ゝ拾ゝ物ゝと
いふゝりてゝれハ實きゝ之びぬ指のをゝわり中ゝ
をゝくもつゝきゝゝふゝをゆゝふゝしゝもわりわ
俳諧ゝとゝれよ頁へきゝ思ゝめゝをゝゝ物つゝれと

いとひよいて見ゆるいい出さぬ世ハさびしくのさ
わるものあるとをゝ〳〵係よ思ふまゝ只とるいとゝ
をてん秋よ得ゝ世ゝといひて百くりつ竹沼よ余白
わるゝよゝをて渋よゝくゝめみさぬ題号といゝく
さと茶の湯なゝくをいゝめゝ其人いつゝゝゝ

世の中ゝすゝれて京ゝよりの山紅葉ハ章四茶ハ
宇治の都の辰巳それ年ゝてゝゝハ都の未申
敷京ゝゝハ淮ゝ名ゝ立て濃茶の文の沼ゝゝ松の
位ゝくゝくてハ国いゝいゝハひゝゝれゝ情ハみれ
庶ゝゝりかゝゝぬ誠わゝ合間ゝ人目の中ゝゝ
ゝゝゝゝいゝぬ口切の後ハゝゝ名の下地宗彩ゝ
月のゝゝつゝてゝれといゝねゝ世の人の口ゝ猫戸も

立ゝれぬわゝて立名ゝ立名の底ゝ底ゝてゝゝゝ
沈田岸山庵ハ雪ゝいふゝゝ山りゝ其白岸の雪
ゝゝて雪ゝハゝぬわれ庶ゝけて物ハみゝ
飛ハ見ゝゝろゝゝこゝ水ゝゝ人ゝゝゝ
のゝハ三ッ椀のかゝゝつゝ怪いい中ゝ底ゝのゝゝぬ
むねのゝ彩わゝ作ゝけぬゝゝゝけゝみゝゝ
ちゝいゝみゝゝてゝゝゝてゝゝ名の柄杓の什ゝ
直ゝれゝとゝゝハ茶杓のゆゝゝ文字ゝせゝゝ
茶せんゝゝゝくゝまの沖ゝゝゝひゝゝゝんゝぬ
岸ゝゝりのゝくゝも京ハタ彩のゝゝハゝめのゝゝ
くれゝ五条わゝゝりや四ゝゝゝゝや三ゝ長ゝ待合ゝ
茶ゝゝのめゝゝ月ゝゝゝわゝハ京ゝ京生ゝゝゝ

[illegible]

のびゝ[illegible]と[illegible]まして釜の中さめを縁ハくらりの

末長くよゝ万代めへ

辻君　ウクノ韻

月よりもなを多きよ　いて夜望と浮名よハ。

神ハ神なりさのくと招きて　格の苔よむしやいふ。

待てお図のさハふくと　あふてもれの袂ハ乾くす。

嘆くうゝてのしゝ[illegible]ハ　馬場の根笠の[illegible]ハ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世為人わかく面く病疲て哀しき事をのべて高し

笠を推て顔の悔まし　笠をうして愛さ錆ず

又　ウクノ韻

紙衾は故人なりしかり。いにしへ為故人なりぬ。

それより故人来故人　只故人を慕ふ事下す。

又　イキノ韻

詩家は李白にして清雅とす。紙衾は紙ふすまして狐狸の棲む。

こうもこころのなぐさ基ぶ様　さらば万巻の酒よりなくし

公相題笠図賛

題笠旅裝奇尋花狂客心豈無芳野句可識不言深

人口　ウクノ韻

俗も雪ちるあるくりつ。　去年の案内も無やあるし。

なつかの七草七りつくそ　そなたの名の字の程を結ん。

蛤　アカノ韻

ものの男の雀なるべ。　竹の枝まなれ一や

人ハ来ぬ笠なる笠かな　東うしの山のしろさ。

寄図扇意　ウクノ韻

そなたも夏のまよ八れつ。いまたくの西をこなる。

一番わらべの名よわ四〳〵ハ　ゝけてゝのうちハゝふむ

五月の節句よ書てあるゝへ一聯句

[illegible]の海ハ四〳〵ゝよ[illegible]くて　[illegible]の山の[illegible]ハ[illegible]ゝ落りて

[illegible]の[illegible]ハ[illegible]ゝ落りて　雪の後ゝ落[illegible]ゝ

大[illegible]語

賢人の耳よ[illegible]ぬハ　風の吹ゝもすゝ〳〵れ一

洛叩も日よ金れハ　雪の降ゝ[illegible]ゝ

鯉の賛

又ゝぬ[illegible]よ思ひとゝそ。　[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ。

のゝれハ落ゝ悔わゝ世よ　[illegible]よ行方を安きゝハ[illegible]。

布袋賛

[illegible]ゝ[illegible]の世ハ〳〵ゝ世ゝ　布の袋の名ゝもなりめ。

悔ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ我を[illegible]ゝ　[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]を[illegible]ゝ。

四文

ゝ〳〵みつゝつまて待そゝ[illegible]ゝ

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]の口ゝて立ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

怪なるようなりよのつねの茶屋体俳やもはなはだよろこ
ばしかりて冠人を責めて世の有様を詠めてわゝ給
坊主の口すさびいぶる
あるさかとを含ふりし口ハ重むくいて勇ましくく
あてなるまつひして若雪よ縁ハ世いて留まるひとり
俳諧ハ古今集よりて俳諧新まるすの集よ
わゝ云人の俳諧ちまて俳諧師の云ハ和歌
ゝ云涙ゝ云ハ和云ハ全所の題をもとめて其題
其ゝよりて他のものゝ名ゝより変ちまりかゝ
ゝ云ハ俳ちまて全く言句まとゝ俳諧ちん
題句一ツまゝて其ゝ分ゝゝゝゝゝ隔ゝてゝ俳の
俗字義の理ハ有てゝゝゝされハ有よ云ゝ

ゝゝめのハ全く俳諧ちまて後のハ和云ゝ
のゝわゝ二ツのさゝひゝをりてゝゝ

いろは歌

いろはの四十七字をもてゝをつくり六歌ふまりて世る
ろゝわよたゝゝひて三そつくり四ちゝゝ俳る

和六林子雅伯題俳諧新寄歌

芭蕉　待得　咲　遠　総　咲
はせをゝまちゝかまちゝえめる　むへもよいろねのゝくゝす
和歌やう詩　作　故　百　詩　遠　袋
わかやう詩　つくりゆゝらわれとゝ　さゝゝいうけてゝ　ゝ　ほめゝふ

雪中三吟

今雪　明初　論歳　充
いまゆきゝまりわけうむる　ゝれうゝぬけなゝてゝく
得　子共　炉ノ火　用　ヒチ　洗
うえにほわわゝめやめつゝしろのひをかゝゝせちるゆゆ

題早梅

室 類
むろたのまてすてに宿 梅 遠 早 咲 見 人 知
いろはやまさきけりにほふ
雪 作 夢
ゆきかくぬはるくしす
春 水
ふゆしらるはるのはつ花 歌 見 賢 智 恵
さいわひはつはこそえらせあまなくるもてゆ
東 春 水
つるはぬ

国の名二十

伊豆 伊賀 遠江 陸奥 義濃 阿波 出羽 加賀 壹岐 甲斐
いつくにわかるるもの多のわてはいるこいもかな
安房 長門 肥後 紀伊 能登 河内 紀伊 備後 飛騨
秋もなる野にしの多ふるはるの月 紀伊 能登 河内 備後 飛騨
みの
伊豆 三河 伊勢 紀伊 加賀 義濃 信濃 丹後 伊予 阿波
いつこ川いせくるまる多のうしの名のくむ多ふるよ

落のこころ

紀伊 出羽 伊豆 安房 義濃 遠江 山城
落出はるわくむ多の後を遠く隔やをのる
播磨 剣馬 志ア
けはしくろく
佐渡 能登 出雲 清水 義濃 加賀 遠江 伯耆 隠岐
里のをもくぬをもろくせをわいきをさて老ひせん
肥前
鳥の名十

鶴 ア 官 鷺 雁 雉子 五位鴨 鶴 水札
ろくつせはをもすをむきをはこいをとをはかり

獣の名十

栗鼠 多 猪 鼠 鹿 猿 牛 熊 狐 猫
ころをこ二多いもを浸すををを君多をををを

東風回暖八畳阿　老對菅花樂若何
六十余齢今得九　人生誰道古来多

[illegible]

四畳半人[illegible]年の市

[illegible]

八幡宮社方
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

市ゝ一ゝゝり無八郎ゝゝ一ゝ一ゝゝ内伝ゝゝ女ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

西りいゝ　　文草

俳　高ゝゝ

此文所ゝ日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

秋の雪一度下り蕾丈くもるくけさ〻髪
両髪よくれ髪つる歯あるくくなりかく
零摩やるころ須史なるかいむるや先生窓
爾くりくれくハ一世まありて名ゑれるまつさま
一墓のちよ逼くくくてかゑ毎くるりくり
くくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世上用弱るつき人ハ鳥獣弁虫の〻〻〻〻〻〻

一絃の筒琴ハ其分行能要あり品あり

ハ渡仕方の条〻ハ度用事ハ〻〻〻〻

一蟬すゝの羽織と着仕事ハ〻〻の至り向後ハ様〻海

一羽めさる紅替ハ〻〻〻〻

一松虫鈴虫の〻〻〻〻籠の〻〻ハ砂糖水と好き交ハ

さ〻〻〻ハ向後ハ野山の通路〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻〻〻〻〻〻〻

ものなり

一 金魚のもの近年こゝの名美なる物なり作向後
金箔の師一人ついをまくく

但赤塗る砂沼書おきハくしうす作

一 給春暖のころ己が快時よりかく樓一客を建てゆ甚
奢のさまなる物きゝ向後ハ右弊の普請一切無用な
り居宅の移植ハ根つゞめ用いまつゝ

一 蝙蝠益を得かゝれ居夜人里村里へ飛廻ること
こ其ことを得ること鳥獸のあゝあこれあるとハ何ハ立
中ぬ多級茶ホ物つゝめるこ不要の至向後ハ立合の
支配をゝけ面級作度つゝめくきま

一 音喚鳥根ま五名の源猪を着いるゝ甚大きゝ

向後ハ行ゝるそも一名る物改勿帰終苗ホ一切いさま
ゝ

一 白魚白者ホ此同ハ物ゝ名作先年ハ頭ゝり白きく
稀ゝるゝゝ近年根ゝる物ゝゝゝ
弟ゝて異物の弊いゝゝ

一 亂婚入の弊ゝ同ゝ廿日亂ゝ五年樣ゝ
ゝゝの三年以後ハ根湯ゝて物後ゝ
天井ゝて踊ゝ作ゝ人ゝ好ゝ物ゝ様
明ゝ二階孫の下ゝゝ盆の中踊ゝ

一 稼ゝつゝ大酒を時亂舞の樂奏ゝ尋陽の江
ゝて出ゝ向後一切無用ゝ
奏ゝて會合ゝ作ゝ

一 酒ハ其拵方のよけ師屋にて小買いたしまゝ

一 煙草りき四匁半ものゝ芝谷立人を遣ゝ後そ者

る金銀と勢ひしひるとよりゝゝゝ右の業相出

者ゝ自分の樂しとゝ敵ゝ事ゝゝゝ

一 馬の太鼓の爰往還向屋敷沙汰ゝゝ不行の至ゝ畢竟

これも栄曙のゝゝ俗ハい俗ハ相止ゝ

但廣ゝとハ芝ゝゝゝ作得ゝ次のゝ時の人鼓ゝ

ゝ合ゝゝゝ樣相ゝゝゝ

一 青畏赤畏のゝゝ畏の皮の種ゝゝゝゝ富時

病犬の皮沢山ゝ得ハ早速仕替ゝ

但右ハ家持ゝの畏の事ゝ借屋住召仕の畏

ゝハ古き相油合羽の切とを賜ゝ用いゝ

右の条ゝゝゝ相寄ゝゝ急ゝ得返ゝれゝゝ

これゝゝゝゝハ急度沙ゝゝ品ゝゝ蟻の四代

組頭ゝて越度ゝゝゝ

宝暦九卯七月

玉壺軒記

憩芝原楚巾老人之需

行ゝ心ゝゝゝ除山の中高庐の下のゝゝゝむゝゝむゝ朝廷

ゝ俗を避ゝゝゝゝ耳目ハ外のゝゝ世ゝゝゝゝゝゝゝん

ゝゝの中中ゝ一ゝの隱家ありて豆腐賣ハゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

九尺ゝゝゝゝ別宝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

作りの人の残し置る目録を見るに今も国にて今ハ行方知
らず人の多き作法山水をしてとゝろ〳〵も世ちりるや
伐木丁〻ハ桶屋のゝゝや呼ぶのゝゝなれハ
菓子屋の背戸ゝ田家山荘の風流なる絵のゝなるを
四方八城下の豊なれハ膳所の笛も雨の日の三味線も
近〻ゝゝ方ゝ音ゝして我身ハゝゝゝる事流ゝハ樵夫
牧笛ゝもしらしさハ赤ゝやゝもやゝ翁の身のゝく
安きゝ住居ハゝゝゝるつゝゝれハ北山移文の悪口を
うゝへゝす名ハ老作しゝて遠ゝけ酒ハ閑明の徳も
なゝれゝ見ゝゝゝゝハ御貸所のゝゝゝゝゝて戸樞を
さゝゝハつゝりのゝゝなゝゝゝされハ軒る玉壺久
二字作題やれゝゝハ一大事のゝん一ゝゝゝゝ

所代宗考もゝ別の頭作作を考ゝのゝを屋ゝゝれ
壺の月別ハ及ゝゝゝゝゝや要も備ゝゝゝ茶ゝゝを
ゝゝて煎茶作藤つゝゝゝゝゝゝて作御ゝゝ天地
をゝゝめ一市中の壺ゝ潜ゝ内作 城内合ゝれハ
見ハゝゝゝゝゝ古ゝゝゝハゝゝて只世亭の入口ゝれゝゝ
宮合れゝゝ内ゝ一ゝ代の唐ゝゝゝゝ亭の壺ゝ
作ゝれハゝのやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
伯ゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ別ハ一生の楽ゝと
世ゝゝゝゝゝゝ屋人ハ世亭の唐めけて暗ゝ
夢ハゝゝゝゝゝゝゝゝ

くさくさの家居八庵ばかりあるを庵主十章の行法
あるく寒冥中に行脚だにあるしハさの間に少々
ゆてもつゝ英茶に送りとゝさこゝに安堂をる人ばか
りあるきを霊験もあるなるめもれたは茶の茶
きこゝろをもとゝもあるされハこゝろの茶の色をし
ゝこゝ五欠宝と称をれたる茶のめとゝ少しをし
あるーさゝ隙白とまーゝ久て一句と詩してやまま
ゝ久をやくゝの氏製に拙るもゝをかるもし
やハりとゝ茶宝の指さゝ用なきを惜れ
ゝもし一鼎の資茶とてもゝのしゝもよれ
さゝあやゝ半坪庵の物文宝に伺ゝとゝりあはゝ
落葉もしくゝたまの坪あり

瓢長者傳

巴陵余に二つの瓢あり其大小化して曲化り曲るあ今き
ゝ久ゝ久ゝ久

[illegible]

惇六庵祥

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

名を[illegible]辞

[illegible]

[illegible]

長[illegible]寺碑

[illegible]

辞世

病来辞世路　久隠[illegible]農　八十余年夢　驚回[illegible]

[illegible]

短[illegible]

天保十二辛丑年

浪華書林

心齋橋通北久太郎町南
鹽屋忠兵衛
合梓

同通本町北
鹽屋弥七

鈴木遺下 二十一

愛知県
1103259482